

例会抄録

イエスの治療と釈迦の治療

杉田 暉道

新しい宗教が多くの人に受け入れられる為には、いろいろな条件が必要であるが、その条件の中で、病気の治療がとくに際だって重要であることは多くの人に認められている。

著者はこの問題について、キリスト教の開祖であるイエスと、仏教の開祖である釈迦について、病気の治療方法の比較検討を行い、注目すべき成果を得たので報告したい。

先ずイエスの治療について述べよう。イエスが活躍する以前のユダヤ社会の政治形體および市民の医療の実体がどのようなものであったかを見なくてはいけない。それは旧約聖書のレビ記につきのように述べている。

政治的には、現在の政府と裁判所が統合された機関として最重法院があり、ここに勤務している役人を祭司と称し、この祭司が、検診、診断、治療、隔離、社会復帰の権限をすべて行使していた。

すなわち、精神的疾患のある者、盲人、らい病患者、不具者達は、神の呪いによって、けがれと罪を背負わされて、このような病気になるのであってと考えられ、社会的制裁の対象とされ、砂漠や荒地に追放された。

イエスは、精神的疾患のある者、盲人、らい病患者、不具者達は、神の呪いによってけがれと罪を背負わされた者ではない。病気になる原因がある為にこれらの病気になるのである。したがって正しい診療を受ければ必ず治ると説いて彼等を治療した。さらにイエスの愛を信じ、今まで犯した多くの罪を懺悔して神に告白し、かつ社会に復帰することを強くおしすすめたのである。

初期のキリスト教の治療活動を、マタイ、マルコ、ルカの三福音書に記された病気なおしの数でみると、延べ一一五話記されている。これは、そのまま、初期キリスト教の伝道に占める治療活動の比重がいかに大きいかを示している。このように治療神が互いに競合しているような治療法が出現したのは、紀元前五世紀頃から紀元後四、五世紀までの間であった。すなわち、紀元前五世紀になると、従来のオリンポスの神々に代わって、アスクレピオスを主力とする神が各地を遊行して治療を行うようになった。それはオリンポスの神々は、もっぱら加持祈祷によつて病気を治療したが、アスクレピオスの医師団は外科的切開手術による治療を行った為に、画期的な評判を得たことによると考えられる。紀元後一世紀になると、イエス及びイエスの弟子集団が病気の治療の遊行を行うようになった。しかもこの時代はアスクレピオスの集団による治療も盛んに行われていたので、イエスをとりまく周囲の状況は始めから非常に厳しかった。とくに紀元後二、三世紀から四、五世紀にかけて、アスクレピオスの側から、イエス

の名前を奉じて町から町へ病人の治療をして歩く弟子集団に対して、ものすごい攻撃が行われた。これに対してイエスの弟子達は言葉に表せない苦難を乗り越えて次第にキリスト教を発展させ、今日のキリスト教となったのである。

つぎに釈迦（BC四六三年～三八三年ころ）の治療について述べよう。釈迦が生存したインドの社会は、アーリア民族の勢力が紀元前六世紀頃にはガンジス河の下流まで勢力が広まり、彼らの伝統医学であるアーユルヴェーダによる医療が広く行われるようになり、現在もインド国民の八割以上の人々がこれにより医療を行っている。したがって釈迦が病人を治療するということはほとんどなかった。しかし彼には名医者婆が侍医として釈迦の健康管理を司さどつていた。彼が名医であったことは、次に示す六種類の治療から十分にうかがえる。

第一は灌鼻法で一一年間患った頭痛を治した症例である。この治療法は現在も行なわれている。当時は灌鼻する液体は酥（今日のバター）を用いた。第二は痔の手術である。鉄槽に湯を満たし、中に患者を入れて、伏せて寝かし、水を患者に注ぎながら呪文を唱えて患者を眠らせる。つぎに排水して患者の患部を切り取って消毒する。その後鉄槽に湯を満たし、水を患者に注ぎながら呪文を唱えようと、患者が目ざめて手術が終るのである。第三は脳の手術である。頭痛に悩んでいる患者に多量の塩分を含んだ食事を与え、ついで大量の酒を飲ませて酔わせておき、身体を動かさないようにしっかりと縛

りつけてから脳の病変部位を除く手術を行った。第四は子供の腸捻転の手術である。第五はまた二二年間患った頭痛を、多量の塩分を含んだ食事と酥を用いて治療した例である。第六は釈迦の下痢を治した例である。

さらに重要なことは、次に述べるように仏教の根本思想である苦集滅道の四諦の思考方法は、何と患者を診察し、治療する場合の思考順序を応用したものであるということである。すなわち患者を診察し治療する場合に、まず患者の病状を正確に把握し、その病状の原因を正しくつきとめてから、病状にあった治療を行うという、治療の順序の考え方に沿って四諦の原理を開発したのである。このことは釈迦は病気についてかなり正確な知識を有していたということが出来る。

（平成十八年六月例会）